

シュミット・マイヤー著
朝日新聞外報部訳

ゴルバチョフ

86・12・17刊、四六判 240頁、1200円
朝日新聞社

きわめて意欲的かつ周到に巨大な官僚的集権国家の転換をはかりつつあるソ連の新しい指導者、ミハイル・ゴルバチョフをどうとらえるべきかは、今日、もっとも知的刺激に富む国際問題である。

それは、クレムリンの権力構造が不透明であるとか、ソ連社会には不可視な深淵が多いからといった、従来のクレムノロジーに共通の理由からではなく、まさに今日のソ連が、ゴルバチョフという「ソ連が過去と本当にたもとを分つしるし」（本書十一ページ）のような指導者を擁するにいたったからにはかならない。

本書は、西独の週刊新聞『ツァイト』のモスクワ特派員つとめたソ連・東欧問題専門のジャーナリストが、ゴルバチョフ台頭の秘密から権力への成功の階段、そしてフレジネフ派のカビの生えたような長老たちとのたたかい、権力掌握後の急速でドラスチックな諸改革の現状などを、ゴルバチョフ自身の人間性にも照明を当てながら、今日もっとも解明を要とする人物の全体像を見事にとらえたアップ・ツー・デイトな著作である。

しかし、いわゆる時事物によく見られがちな薄っぺらい分析では決してない。「フルシチョフはスターリンの亡霊に、進んで一人で立ち向かった。三十年後のゴルバチョフは、スターリンの遺産、すなわちソ連の旧弊な中央集権的経済構造に対し

て、周到に計画した大規模な攻撃をけようとしている」（同七ページ）。「ロシアの歴史に根ざした非能率と腐敗の世界——ゴルバチョフが政治的に、また社会的に取り組んでいかなければならないのはこうした世界なのである」（同四八ページ）といった著者の基本視座を中心に、ジャーナリズムの真価とは、どのような分析と筆法ではないかと思われるほど内容的にも充実しており、彫りの深いものになっている。

同じモスクワ大学出のライサ

広い現代的視野

全体像を見事に

中嶋 嶺雄

は、過殺のレイキャビック会談に見られた米ソの軍事・安全保障上の角逐にもかかわらず、「ひよっとすると、同年か後に、米ソ超大国の競争は、軍事的観点よりもむしろ双方に利益をもたらす経済的観点で記されるようになるかもしれない」（一七七〜一七八ページ）と本書を結んでいる点に、著者が一般のソ連ウォッチャーとは違う広い現代的視野をもっていることが示されている。

著者の描くゴルバチョフ像は、たんなる「希望の星」としてではなく、あくまでも政治的可能性として語られており、彼の登場がいかにソ連社会にとって期待されたものであったかが本書によって明瞭になる。

もとより、著者のような見方は、旧来の保守的なソ連認識からは出てこないだろう。ソ連を諸悪の根源と見做し、誰が指導者になってもソ連は変わらないとするような、わが国の一部に依然として根強いソ連観によって、今日のゴルバチョフ像はどういともえられない。本書を讀むと、『ニューヨーク・タイムズ』のソ連通記者として知られるハリソン・ソールズベリーのゴルバチョフ論（『ゴルバチョフのジレンマ』、『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』一九八六年七月二十七日号）でさえも、まったく色褪せてしまうほど、本書の切口は鋭い。

私自身、わが国のソ連研究者の一部に支配的なソ連社会不変論、ソ連脅威論にささやかな挑戦を試みる意味もあって、つい最近、拙著『ゴルバチョフ・ソ連の読み方』（第一企画出版、一九八七年）を刊行したばかりであるので、ゴルバチョフ・ソ連の解説のために、本書と併せてお読みいただければ幸いである。（東京外国語大学教授・国際関係論）